



TITLE:

古典籍と目録

AUTHOR(S):

西田, 龍雄

CITATION:

西田, 龍雄. 古典籍と目録. 静脩 1991, 28(1): 1-3

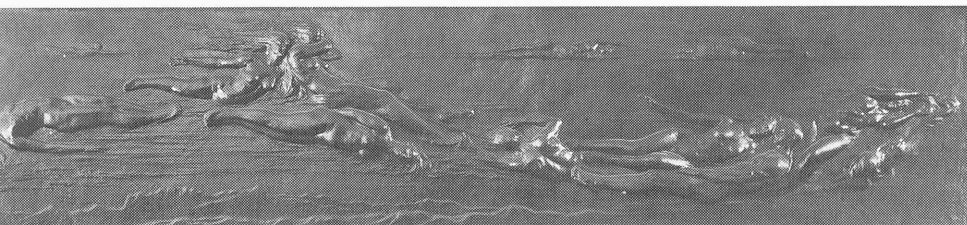
ISSUE DATE:

1991-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37105>

RIGHT:



静脩

1991年 7 月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 28, No 1

古 典 籍 と 目 録

附属図書館長

西 田 龍 雄

人類の記録は、さまざまな素材で遺されている。よく知られるように、西方ではメソポタミアの粘土板からはじまり、金石、パピルス、蠟板、羊皮などを経て紙に到達した。それらの素材の形態もいろいろに変えている。東アジアの漢字文化圏でも、約6千年前の陶文からはじまって、甲骨、金石、木竹簡、帛を経て、東漢以後漸次紙の使用へと移っていった。唐代から印刷術の興起にしたがって、書籍は手写本から、雕版本へと改められ、巻軸の形から冊子体へと移行した。ごく最近になって電子メディアによる記録へと向いつ、ある。

東アジアの漢字以外の文化圏では、書籍はそれぞれ特有の素材と形態をもっている。西方に拡がるチベット文字を常用する地域では、近年では冊子体が普及しつ、あるけれども、その主流は依然として、横長の紙(厚いものから薄手のものまで)一枚ごとに表裏に刷って、糊付けしないで束ねる形を取り、版木を一枚一枚刷り上げていく手工業的印刷がいまでも手堅く伝承されている。

もっとも最近では、同じ体裁の機械印刷による活字体が出回りはじめた。

インド文化の強い影響によって生まれた東アジ

アの第3の文字圏、東南アジアから雲南に及ぶ地域では、現在はそこでも冊子本が主流になってきたが、少し以前は棕櫚の葉を素材として、小刀で文字を刻むいわゆる貝葉本が常用されていた。雲南の傣族の分布地では、いまなおこの貝葉本が造られている。

昨年、雲南省の東南部、ラオスとビルマに接した西双版纳^{シーサンパンナ}傣族自治州を訪れた。さすがに亜熱帯気候で六月というのに予想を越えた暑さに閉口したが、ある寺院に行ってみると、若い僧侶が經典の見本を傍に置きながら、棕櫚の葉に経文を刻んでいた。もう20年以上も昔になるけれども、タイ国の北部のガソリンスタンドで、年輩の従業員が客を待ちながら、同じように見本にならって、棕櫚の葉に文字を刻んでいた姿を思いだした。出来上がった貝葉本のいくつかは、町の骨董屋に並ぶかも知れないと思ったりした。

近頃は少なくなったが、以前は貝葉本の鑑定を依頼されて困惑したものである。一見すると同じような体裁をとっているものの、中味は大きく違うものがある。ほとんどはインド系の文字の一つで刻まれているが、文字の組織も違うし字形も異

って、内容の判定には相当に骨が折れた。それらの文字の分布地は、小乗仏教圏とほぼ一致するが、内容は必ずしも仏教関係のものとは限らない。

要するに、貝葉本であるという体裁は似ていても、中味はさまざまで一律には扱えないのである。

わが図書館にこの種の書物が大量に持ち込まれたりすると、館員諸氏はその目録の作成に大いに当惑するに違いない。

私は西双版纳傣族の文化を支えた貝葉本にかねてから大きい興味をもっている。傣族の使うこの文字は、のちにや、改良されて来たが、本質はチェンマイの古い文字と同じ系統で、クルクルとした丸味を特徴としている。しかし、組織は複雑で読み下すのが至極むづかしい。

最近「貝葉文化」と呼ばれるように、貝葉本の果たした役割はずい分と高く評価されている。

傣族がなぜ貝葉を採用したかの経緯を説明するお話がある。それはまた記録の存在と素材としての貝葉の特質も伝えている。

「昔、一人の青年が愛する女性から離れて、太陽のもとに光明と幸福を求めて旅立った。若い二人は、芭蕉の葉にお互いの言葉を書いて鸚鵡に托して連絡する約束をする。青年が遠くに行くにつれて鸚鵡がとどける芭蕉の葉は途中で枯れて破れてしまう。青年は偶然に森の中で、小さい虫が、枯れて何年もたった棕櫚の葉の上を這いまわって、はっきりと跡をのこしているのを発見する。日に晒され雨に打たれても破れないこの葉こそ文字を刻んで永く保存するのに最適であることに気付いた。それ以後、鸚鵡は青年の消息を無事恋人にとどけることができるようになったとさ。」

青年はついに太陽の許に辿り着けなかったが、保存に耐える素材の発見は大きい収穫であったと語られる。

こ、数年この傣族の貝葉本は整理が進み、目録も作成されつゝある。内容は広い範囲にわたるが概略を記すと、天文暦法に関するもの、史書（編年史、事件記録）、法典、道德説教、宗教經典、故事伝説などがあり、全部が傣語で書かれたもの、半分が傣語で半分がパーリ語、そして全部がパーリ語のものに分けられる。

その一部はB 6版の冊子体となって、手書きの原文のほかに漢訳がついて刊行されて来たから大へん便利になった。

しかし中国で刊行されるこの種の民族古典籍の冊子体は、書名など目録作成に厄介な問題がある。もっと簡単な例から、二、三のことを述べておきたい。

手許に^{ナシ}納西族の友人からもらったB 6版の小冊子がある。実はその友人が編纂したもので、本来は納西文字で書いてあった内容を、1983年に修正されたラテン文字表記法で書き改めたものである。もちろん書物の体裁も横長の貝葉型（素材は厚手の紙）から、冊子体に変まっている。よく知られるように納西文字典籍は特別な象形字形を写実的に配置して、しかも言葉全体を書かないから、普通は東巴^{トンバ}（巫師）以外は簡単に読み下せない。友人は東巴の家系に生まれた著名な学者である。接しにくい古籍の内容が冊子体に姿を変えて世に出るのは大へん有り難い。現在中国で刊行される少数民族言語で書かれた書籍には大抵は漢語の書名が奥付についている。これは取扱い上便利である。この書には、和志武編『黑白争戦』とある（昆明、雲南民族出版社、1987）。ところが表紙の書名は『DDUQ'AIQ SVQ'AIQ』となっている。

中国少数民族言語のローマ字表記は、日本人のローマ字感覚で読んではいならない。たとえばこの「Q」は下降型の声調を代表していて「ク」とか「キュ」ではないし、「'」は音節の切れ目を示す附号である。必ず決まった約束がある。この書名は正しくは、『du 31 æ31 sv 31 æ31』（31は下降型声調、ちなみに納西語は4声ある。）と読む。逐語訳すると、「ドウ族の戦、ス族の戦」という意味で、漢訳書名とはそのまゝ対応しない。

この作品は、『創世神話』『降龍神話』と並んで納西文学前期の傑作といわれる物語である。光明を代表し太陽を造るドウ族と黑暗を代表し太陽の光を盗み去ろうとするス族の決戦、つまり善と悪が戦う話で、最後には光明が黑暗に打ち勝つ。

昨年大理を訪れた際、この物語を映画化するらしく、「黑白戦争」の看板をつけた撮影隊に出会った。その作品名は『黑白戦争』として定着して

いることは理解できるが、この書籍の目録はその漢訳書名をあげるだけに満足してよいのだろうか。

いまでも私の手許に漢語の奥付けのない少数民族語の刊行物があるように、近い将来、原題のみを対象としなければならない時代が来て、しかも書誌情報は正確でなければならない、つねに正しい読み方で入力しなければならないとなると、目録の作成は至極厄介な仕事になるだろう。

原題と奥付けの漢訳名の不一致にはいくつかのタイプがある。黒白戦争のように漢訳で慣用名を使うほかに、原題は具体的な内容を指しているのに、漢訳名は概括的な書名を与えているものも多い。実は上述の傣族の古典籍もその範疇に入る繁雑な例である。ここで単純な例の一つあげておきたい。

手許にこれも B 6 型の小冊子だが、漢訳奥付けでは、『西藏文法四種合編』（藏文）図称三菩札等著となっている書物がある。（第四次印刷、民族出版社、1989）しかし表紙とタイトル頁にあるチベット語書名を訳すと『三十頌・添性論とその注釈、シトゥーの口訳』トンミサンポータとグルチュ父子選著となる。1989年に4刷まで行き、全部で15万部も発行しているが、内容は専門学術書なのである（なぜそんなに多数刊行されているのかわからない）。タイトル頁の裏側にある「本書は

シガツツエ
日喀則のタシ・ゲペル寺院にある古い雕板から翻印したもの」（活字本）という書誌情報は是非付け加えていただきたい。

少なくとも特定の大学図書館では、このような古典籍の処理を十分できる人材がいることが望ましい。それには単に文字の習得だけではなくその文字と深くからんだ言葉の習得も重要なのである。

自動翻訳が進んでくると、いずれ創設されるであろう翻訳センターのような機関から外国語文献について有用な情報を得ることが可能になる。須く専門家の協力を得て、世界の文字について、世界の言語について解説と見本を提供してくれる Database の作成が必要になろう。これはさほどむづかしい仕事ではないように思える。そしてまた手にある資料をかゝえたとき、どこの文字が使われ、どこの言語が記録されているかを判定してくれる機関もほしいものである。これは国際的な機関になるかも知れない。そのような機関は、世界中に埋れる稀書珍籍を発掘する役目も果たしてくれることになるだろう。

私の所蔵する数点の貝葉本も、いずれは京大図書館に寄贈したいと思っているが、そのときには、各本の内容を判定して正しい目録が入力されることを期待している。

パリ市歴史・地誌関係資料コレクション

工学部教授

加藤 邦 男

今回、本学附属図書館に収蔵されることになった、パリ市史料、144タイトル、273冊は、特別の由緒のあるコレクションではなく、近年フランスの古書市場に流通する特にパリ市に関連した史料的价值が認められるものを、表題の名称のもとに一まとめにしたと聞いている。それは、18世紀から最近までの約250年間に出版された古書類で、その内容は雑多である。これを通覧して、建築的にみた史料的特徴の幾つかについて述べておく。

書誌的にみれば、初版本の他に、版を重ね改訂

を受けたものなどがあるが、それらの出版年別にみたタイトル数はおおよそ次の通りである。すなわち、18世紀刊行本が7タイトル（うち20世紀初頭の複写本1冊、銅版パリ大地図の復刻本1冊を含む）、19世紀前半のもの8タイトル、19世紀後半のもの55タイトル（15世紀の手稿本の刊本1冊を含む）、20世紀前半のもの62タイトル、20世紀後半のもの10タイトル、年代不詳のもの2タイトル、合計144タイトルである。また内容的にみて主なものを挙げると、通史・概説は1724年刊本か